

# 生命共同体の担い手たち ロレンスと生きもの

古我正和

〔抄録〕

地球上の生きものが年々姿を消しているが、これは文明の進歩や地球の成熟によるものとして、簡単に済ませる訳にはいかない。ロレンスは二十世紀に至って神の呪縛から解き放たれた人間を新たな目で見て、その中から以前とは違った独特の目で動植物を見ようとする。彼の作品には動植物を通して他次元をかいま見る驚きと興奮が感じられる。そして人間も含めた地球上の生きものたちは、それぞれの進化の程度に応じて生の営みを行い、人間はたまたまその進化を最も遂げたものとしてその段階での生き方をしながら、生きものを人間の仲間として考えていたことが分かる。そこには動植物を人間と共にこの地球に住みつ়く生きものとして、互いを尊重しつつ生きていこうとする考えがある。それは新しい生命共同体をなし、人間によって虐げられてきた生きものはその生存権を回復し、新しい共生社会をめざすことになるのである。

**キーワード** ロレンスの生きもの観、動植物の生存権の回復、生命共同体、共生社会

## I

今、我われ人間と共に地球に生息してきた生きものが、年々姿を消している。最近コウノトリが長年の復活作戦の甲斐あって、自然に放たれるまでになった一方で、国家の事業として何年にもわたって取り組んできた朱鷺の保護が、うまくいっていないのがその象徴的な姿であるが、以前には我われの身の周りにもずいぶん多くの動物たちが飼育され、人間と共に働き、生きていたものである。それが現在ではアフリカでさえも、動物たちは自然動物園の形で一箇所を集められて管理されている。文明の進歩と共に自動車や耕耘機が取って代わり、動物の出番がなくなってきている。一方、最近の地球規模の異常気象や、あい変わらず続いている大小さまざまな国際的な争いを考えてみると、この現象は文明の進歩や地球の成熟によるものとして、簡単に済ませる訳にはいかないと思われる。こういう事を念頭において、ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) が生きものをどのように見ていたかを考えてみたい。

ヨーロッパはルネッサンス以来近代化を突っ走ってきたが、十七世紀から十九世紀のヴィクトリア時代を経て、ようやくそれをゆっくり振り返ることのできる二十世紀に、ロレンスはその作家活動を始める。同時代のフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の影響で、人間の精神をその内部にまで立ち入って考えるようになる。と同時に神の呪縛から解き放たれた人間を新たな目で見て、その中から以前とは違った独特の目で動物を見ようとするのである。近代が生み出した進化論の影響を受けて、万物の霊長たる人間までの進化の途上にあるものとして、彼は動物を考えたようである。

この考えは彼がメキシコで書いた紀行文の中に見られる。メキシコのオワハカ (Oaxaca) に滞在していた1924年、ロレンスは自分の宿で飼われているオウムと犬とをめぐって、「コラズミンとオウム」(“Corasmin and the Parrots”) という名の興味深いエッセイを書いている<sup>(1)</sup>。これは後に紀行文『メキシコの朝』(*Mornings in Mexico*, 1927) に収められた。

コラズミンというのはその犬の名前であるが、オウムは先住民でロサリノという名の使用人の口笛を真似る。ロサリノはひとりで居る時には、感情を込めて精一杯口笛を吹き鳴らす、内気なので他人の前ではそうではない。それがひとりの時のように勢い良く聞こえるので、ロサリノの方を見るが聞こえてくる方向は木の上の方で、ロサリノ自身はきまりの悪い様子をしている。オウムの口笛の方がいつもロサリノより上手だと書かれている。人間以外の動物が出す声に、このように人間の声に似た皮肉を込めることのできるオウムの声に、彼は驚いているのである<sup>(2)</sup>。同様にオウムは玄関に来客があるのを、犬以上に上手に知らせるキャンキャンと鳴き真似をする。しかし犬は悔しがったりはしない。

ここでロレンスは「進化」ということに思いを馳せる。犬が悔しがらないのは次の段階までまだ進化していないからだという。進化論で考えるそれぞれの発展段階に応じて、動物たちは自分の属する次元の法則に従って、振舞っているというのである。

この考えの背景には古代アステカの信仰があるが、ロレンスは百年近くも前、このアステカの信仰について詳しく語っている<sup>(3)</sup>。すなわち、古代アステカでは太陽は今までに四つあり、現在のものはその五つめであるという。そして三番目の太陽は水中で爆発し動物から進化した初期の猿人ともども、不必要だと思われたすべての動物たちを溺死させ、その大洪水の中から今の人間に属する太陽と、小さな裸の人間が生じた<sup>(4)</sup>と述べている。

人類はかつて一度滅亡しようとしたというこのアステカの信仰は、『恋する女たち』(*Women in Love*, 1920) の中のバーキンの言葉などに見られる、人類の滅亡についての考え<sup>(5)</sup>と関連があるように思われる。そこでは植物が、人類の滅亡の可能性とは無関係に繁茂している様子が述べられている。

ここにはロレンスの動物観、生きもの観が見られる。他次元をかいま見る驚きと興奮が感じられるのである。詩集『鳥・獣・花』(*Birds, Beasts and Flowers*, 1923) の中で描かれる動物たちに対するロレンスの考えも、このようにしてうかがうことができる。

## II

この詩集に収められている詩「聖マタイ」(‘St. Matthew’)の中でロレンスは、自分が天に昇って行っても必ずまた地上へ戻らせて欲しい、地上には多くの動物たちがのんびりと生きていと聖マタイをして祈らせ、地上に帰った時の多くの動物を描いている。ところがその多くの動物について、その描き方に興味深い、微妙な違いが見られる。先ずコウモリから見てみたい。彼はコウモリの翼を持った (Bat-winged) 人間は、もはや神の玉座へは昇って行くことはできないという。コウモリは神や天国とは縁のない、世俗の象徴として語られているのである。また天空を移動するロケットの噴射も逆向き (reversed) であって、天国とは逆向きの方向である<sup>(6)</sup>。そしてこの、天国とは逆向きの方向にあるものこそが、四つの福音書の筆記者としてロレンスが表象している四つの獣が、本来在るべき場所だと思われる<sup>(7)</sup>。

これに対して、コウモリと対照的に用いられているのが雲雀である。雲雀は朝には翼をつけて天上の神の御もとへおもむく。しかしそれほど神に愛されていても、コウモリに出会えばとたんに天国から離れてしまうという。雲雀は神へ向かう気持ちの象徴である。マタイには神へ向かう無垢な気持ちがあると同時に、紛れもなく、コウモリのように「常にどす黒い血を前後に投げかける」<sup>(8)</sup>のだという。これは上の方で神から脱却して地上へ降りてくる、普通の人間としてのマタイの姿である。

このように雲雀とコウモリは両極端の象徴として用いられている。これは朝と夕方の対照としても用いられている。「コウモリ」(‘Bat’)の詩では、夕方から闇の世界に向けて活動を始めたコウモリが、雲雀と同じく光の中で、神の恵みに浴しながら飛び回っていた燕と間違えられている。また夜行性のコウモリが寝る時の、袋をぶら下げたような格好などから、コウモリが不気味なものとされているようだ。

このようにロレンスは動物について、何か特別の考えを持ち、種類によって序列があるかのように考えていることが分かる。そしてこれは、先にメキシコの紀行文にみた、進化論を背景とした動物の進化論的序列と関係があるように思われる。

## III

次に進化の面で非常に古いものとされる、亀についてみてみよう。ロレンスは子亀をも、あの勇敢なユリシーズにたとえる。

How vivid your travelling seems now, in the troubled sunshine,  
Stoic, Ulyssean atom;  
Suddenly hasty, reckless, on high toes.<sup>(9)</sup>

常は不活発でなまくらな亀も、日光にまともに当たると、何かに追われるように動きが大胆になる。けれどもその体形からは大して早くは進めない。それでもなるだけ大股にふんばって進もうとする姿勢が「つま先をふんばって」(on high toes)に出しており、その気持ちが「辛抱強い」(Stoic)に見られる。そしてこれは子亀だからこそますます強く感じられる。

子亀は孤独 (alone) だとロレンスは推測する。しかしそれはあくまでも推測であって、亀自身はそうは思っていない。このことは次を見れば分かる。

Alone, with no sense of being alone,  
And hence six times more solitary ;  
Fulfilled of the slow passion of pitching through immemorial ages  
Your little round house in the midst of chaos.<sup>(10)</sup>

だからこそ数倍も孤独だという。この場合数倍孤独だと思うのは人間だ。ロレンスだ。ここにロレンスの動物観がある。彼がこの詩を書いた所以がある。亀は万年の寿命をまっとうと言われるが、そう考えられるのは亀がものぐさで、のんびりと生きているからであろう。それが「記憶を絶した年月を通して」(through immemorial ages)に出しており、その生きる世界が「混沌のただ中」(the midst of chaos)であるという中に、ロレンスの世界観、宇宙観がうかがえる。そして次のように述べてこの詩を終える。

Traveller,  
With your tail tucked a little on one side  
Like a gentleman in a long-skirted coat.

All life carried on your shoulder,  
Invincible fore-runner.<sup>(11)</sup>

ロレンスは亀を「全ての生きものを背負って」(All life carried on your shoulder)進む「旅人」(Traveller)、「不屈の先導者」(Invincible fore-runner)と呼ぶ。その誕生の時の神の采配、新しい言い方をすればその時のDNAの配列の偶然によって、あのような不便で、非活動的な体形になってしまったが、しかしその背には全ての生きものを背負ってしっかりと行く末を見据え、誰にも指図されることなく先駆者として、まっしぐらに旅していくのだという。だからこそ亀はユリシーズなのである。

「亀の甲羅」(‘Tortoise Shell’)の詩では亀の甲羅に見られる模様と数に得も言えぬ不思議

をロレンスは見る。縦と横の筋が入っているところから、十字架のイメージが先ず出てくる。

The Cross, the Cross  
Goes deeper in than we know,  
Deeper into life;  
Right into the marrow  
And through the bone.<sup>(12)</sup>

十字架は人間が思いもよらぬほど深く入り込む (Goes deeper in than we know) という表現の中に、その「不思議さ」が感じ取られる。その甲羅の模様と数が、ギリシャの数学者ピタゴラスまでさかのぼって論じられる。

ここで我われには中国の亀甲による占いが思い浮かぶ。古代中国の周では亀の甲羅を焼いて、その割れ方によって政治を占った。この方法はその後亀の甲羅ではなく木や竹片に変わったが、自然の現象の中に人知の及ばない何ものかが隠されているというロレンスの考えは、古代中国の亀甲に端を発する占いと、そこから発展したと思われる漢字の象形文字の精神の中に見ることができる。

亀甲の模様が区分される数がいろいろあることを不思議に思うのは、ちょうど昔の中国で亀甲にできた割れ目で物事を占ったのと似ている。そしてその気持ちを、「命あるものが亀甲にできた計算機で遊ぶ」と次のように描いている。

It needed Pythagoras to see life playing with counters on the living back  
Of the baby tortoise;  
Life establishing the first eternal mathematical tablet,  
Not in stone, like the Judean Lord, or bronze, but in life-  
clouded, life-rosy tortoise shell.

The first little mathematical gentleman  
Stepping, wee mite, in his loose trousers  
Under all the eternal dome of mathematical law.<sup>(13)</sup>

「生ある物が……遊ぶ」(life playing) という表現には、生命の誕生のイメージから進化論が思い浮かぶが、まさに生命の誕生の原初に、モーゼが十戒を石板に書いたようにではなく、神ならぬ生命のDNAが、今誕生したばかりで頼りなげな亀の甲羅に、永遠に続く最初の計数板に生命をしっかりと刻み込んだ (establishing the first eternal mathematical tablet) のだ

という。そしてその模様の数配列をめぐって、そのDNAの巧みさに感嘆するのである。ここでは生命の誕生を、モーゼ以前の、つまり宗教以前の現象として考えていることが分かる。その数の配列は、人間が生み出した十進法や数学上の法則よりも先に、だぶだぶのズボン履いた不恰好な亀の、永遠に生き残る甲羅のドームにしっかりと刻印されるのである。

しかしロレンスは、浦島太郎が助けた時亀を苛めていた子供たちのように、ただ亀をなぶり物にしているだけではない。先にみた「十字架」もそうなのだが、亀の心にまで踏み込む。

The Cross!

It goes right through him, the sprouting insect,

Through his cross-wise cloven psyche,

Through his five-fold complex-nature.<sup>(14)</sup>

亀はその不恰好な肢体と、不器用な生き様の中で魂は引き裂かれ、その本性は屈折しているという。亀の生き方の中に何かを見ている。そして最後にこの亀にすべての動物の基本を見てこの詩を終える。

ロレンスは自然が人間に発する伝達、謎を感じ取って、かつて古代中国で亀甲に映し出された伝言を神官が解き明かしたように、それを解き明かそうとしたのである。

#### IV

次に進化の考えが植物の面でどのように表れているかを見てみよう。ロレンスは花を進化の程度によって分類する。そして「イチジク」(‘Figs’) の詩の中で、イチジクの花の在り方を示すために、バラ科のものと比較して次のようにうたう。

There never was any standing aloft and unfolded on a bough

Like other flowers, in a revelation of petals;

Silver-pink peach, venetian green glass of medlars and sorb-apples,

Shallow wine-cups on short, bulging stems

Openly pledging heaven:

Here's to the thorn in flower! Here's to utterance!

The brave, adventurous rosaceae.<sup>(15)</sup>

イチジクの花は他の花のように、花びらを派手に見せて、今まで大枝の上に高く花を広げることはなかったのに対して、桃や西洋カリンなどの華やかで大胆なバラ科の花は、無遠慮に天

に向かって乾杯するという。

そして「ブドウ」の詩では、初めブドウ以外の、リンゴとかイチゴ、桃、梨、黒イチゴなどはすべてバラ科の果物で、解放的なバラから開けっぴろげの顔をして生まれたという。

Ours is the universe of the unfolded rose,  
The explicit  
The candid revelation.<sup>(16)</sup>

ぼくらの (Ours) は現在の時点でのこと、すなわち次の連の「大昔」でないものことである。と同時に、ルネッサンス以前と以後との違いでもある。ルネッサンス以後は「開けっぴろげ」の世界なのだ。

今の現実の世界は開いたバラ (unfolded rose) の世界だという。「開いたバラ」とは何だろうか。これはバラの花のつぼみが開いているという、具体的な状態であるのとは違う。それは哲学的用語を用いて、あからさまなもの (the explicit) とも、開けっ放しの開示 (candid revelation) とも書かれているが明確ではない。これは次に出てくる大昔の状態まで読んできて、ようやく分かってくる。ここまでブドウ以外の、ブドウよりもっと進化したものをうたってきたが、ここに至ってブドウはこれらのものと対照的なものと次のようにうたう。

But long ago, oh, long ago  
Before the rose began to simper supreme,  
Before the rose of all roses, rose of all the world, was even in bud,  
Before the glaciers were gathered up in a bunch out of the unsettled  
seas and winds,  
Or else before they had been let down again, in Noah's flood,  
There was another world, a dusky, flowerless, tendrilled world  
And creatures webbed and marshy,  
And on the margin, men soft-footed and pristine,  
Still, and sensitive, and active,  
Audible, tactile sensitiveness as of a tendril which orientates  
and reaches out,  
Reaching out and grasping by an instinct more delicate than  
the moon's as she feels for the tides.<sup>(17)</sup>

昔バラ科の花がまだ進化していない地球の氷河期の頃、薄暗くて花咲かず、つるを持った植

物が繁茂し、両生類がはびこって人類はまだ地球の片隅でみすぼらしい状態であった。

しかし人間はその時、無口でつるのように敏感で活動的 (sensitive and active) だったという。そして聴覚と触覚があり、月が潮を感じる時よりもっと微妙な本能をもって伸び、つかみかかっていたという。これによってロレンスが、植物にも進化の考えを持っていたことが分かる。

このような記述から考えると、ともすればコウモリや犬を何か低俗なものとし、雲雀やオウムなどを高尚なもののように、ロレンスが考えていたような印象を受けるけれども、そうではなくて、人間も含めた地球上の生きものたちは一つの生命共同体に属していて、それぞれの進化の程度に応じて生の営みを行っていて、人間はたまたまその進化を最も遂げたものとして、その段階での生き方をしながら、生きものを人間の仲間として考えていたことが分かる。それは夜には天上の神の世界からこの俗世に戻ってきて、生きものと共に仲良く生きるという、先にみたあの聖マタイの生き方の根底を流れる考えである。

これがロレンスの動物観、生きもの観である。そこには人間を「万物の霊長」などとは決して考えず、動植物と共にこの地球に住みつく生きものとして、互いを尊重しつつ生きていこうとする考えがある。

ただコウモリやブドウのつるなどは、現代の文明人よりもはるかに優れた能力を持ち、それは原始時代には人間も含めたすべての生きものに備わっていたものの、文明化の中で人間から失われていったものであって、その意味でそのような能力を持っている動物に対して、ロレンスは畏敬の念を表している。

## V

蛇は動物の中でも特別に扱われている。ロレンス自身、蛇には複雑な考えを持っていた。蛇の詩 ('Snake') にいたるまでに、ロレンスはアメリカのニュー・メキシコで蛇踊り (The Hopi Snake Dance) を体験する。ここでは毒をもったがらがら蛇が神官の口にくわえられて登場し、最後には地面に放たれる。そのしばらく後イタリアのタオルミーナでも蛇が見いだされる。イタリアの山荘フォンタナ・ヴェッキアで書いた<sup>(18)</sup>詩の中で、黄色い毒蛇が宿の水鉢で水を飲んで、崖の穴の中へ帰ってゆくのを彼は見る。折りもおりタオルミーナがあるシチリア島ではエトナ山から噴煙が上がっていた。そのことをロレンスは次のようにうたっている。

Being earth-brown, earth-golden from the burning bowels of the earth  
On a day of Sicilian July, with Etna smoking.<sup>(19)</sup>

ここではわずか一行の中に地球・大地 (earth) という言葉が三回も使われている。また地



球や地面の色を表す茶色 (brown) や金色 (golden)、地球の内部を表す「燃える内部」 (burning bowels) も用いられている。そしてエトナ火山の描写によってその部分は締めくくられている。また少し後の方でもその蛇を「大地の燃える腹の中へ帰ってゆく」 (...depart... / Into the burning bowels of this earth<sup>(20)</sup>) と彼は述べている。これはこの詩の後の方で述べられる蛇と地下との関係、すなわち地下の世界で王位についていたが、その後に蛇が王冠を奪われることの、いわば伏線となっている。

地下の溶岩がこのように流れ出す描写は他の詩にも見られる。噴出した溶岩が固まっている様子を描いた「平穩」 ('Peace') という詩は次のように描かれている。

Brilliant, intolerable lava,  
Brilliant as a powerful burning-glass,  
Walking like a royal snake down the mountain towards the sea.<sup>(21)</sup>

王者たる蛇 (royal snake) という表現の中に、蛇に対する敬意が表れている。

このように考えると、同じ詩集『鳥・獣・花』の中に収められていて、一見その詩集の題名と関係がないように思われるこの「平穩」という詩も、このように地下の蛇を通して関連することが分かる。そしてこの詩の近くに収められている詩「変革者」 ('The Revolutionary') の中でサムスンが破壊しようとし、また「聖ルカ」 ('St Luke') の中で雄牛がその巨大な力を発揮して破壊しようとしたのは、実はこの蛇を追放した旧来の勢力、寺院とそれにまつわりつく因習だったことが分かる。これらの詩は同じ詩集の中に収められ、彼らがそうして奪い返したものは、その蛇がかつて奪われた笏 (王冠) として蛇に返却されることになる。

ここに、『メキシコの朝』で早くから描かれている蛇にまつわるイメージがあり、宇宙と地下の結合がある。このようにしてロレンスの新しいユートピア、新桃源郷の住民たちが出そうことになる。それは新しい生命共同体をなし、人間によって虐げられてきた生きものはその生存権を回復し、二十一世紀に求められている、新しい共生社会をめざすことになるのである。

〔注〕

- (1) Cf. Preston, P. A *D.H.Lawrence Chronology*. St.Martin's Press. 1994. p.116.
- (2) Cf. Lawrence, D. H. *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. Penguin, 1981. pp. 10-11.
- (3) Cf. *Ibid.*, p.14.
- (4) Cf. *Loc.cit.*
- (5) Cf. M. Koga. "IMPERSONALITY in D.H.Lawrence II" *Circles* Vol. 4. p.19. Cf. D. H. Lawrence. *England, My England and Other Stories*. ed.Bruce Steele. Cambridge: Cambridge UP, 1990. p.15; Cf. D. H. Lawrence. *Women in Love*. eds. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen. Cambridge: Cambridge UP,1986. pp.127-128.
- (6) Cf. Lawrence, D. H. *The Complete Poems of D. H. Lawrence,I*. eds. Vivian de Sola Pinto

- and Warren Roberts. London : Heinemann, 1972. p.322.
- (7) Cf. M. Koga. "Matthew, Traveller Back and Forth in the Space—Lawrence's View of Universe" *Review of English Literature*, The English Literature Society of Bukkyo University, No.13. pp.35-36.
  - (8) *The Complete Poems, op.cit.* p. 322.
  - (9) *Ibid.*, p.354.
  - (10) *Loc.cit.*
  - (11) *Loc.cit.*
  - (12) *Loc.cit.*
  - (13) *Ibid.*, p.355.
  - (14) *Ibid.*, p.356.
  - (15) *Ibid.*, p.283.
  - (16) *Ibid.*, p.285.
  - (17) *Loc.cit.*
  - (18) Cf. Preston. *op. cit.*, p.84.
  - (19) *The Complete Poems, op.cit.*, p.349.
  - (20) *Ibid.*, p.350.
  - (21) *Ibid.*, p.293.

(こが まさかず 英米学科)  
2005年10月19日受理